山洛門誌

Yamaji no Tsuyu
[Kyoto, 1654?]

PL 787
.Y27
1654
copy 1
Asian
Japan
Cage

2004561305

60.

これは光源氏の出生(しゅっしょう)のことを書いたところであるが、

これからのちの物語を読むにあたって、

ここはよくよく注意して読んでもらいたい。

ゆめの夜(よ)の風景(ふうけい)をえがいたのは、

のちのちの物語の伏線(ふくせん)になっているのである。

やうやう白(あ)き中の袷(あわせ)を着(き)て、

引(ひ)き入(い)りたまふ。

などの文章(ぶんしょう)を書いたところは、

人物(じんぶつ)の描写(びょうしゃ)がすぐれている。

人柄(ひとがら)もよく出(で)ている。

やさしくなよなよとしているが、

ふところの深(ふか)い女(おんな)の性質(せいしつ)を

もよく描(えが)いている。

これをうけおふのさくだのあるつゐもてけれ
どもそていろふんとくらひつろうへのもゐ
とこころぐろりのさあてあくさまのつをさけろ
やおふんそれろれろりくげろふのもゐはのく
まノさくつけのそくし後いいろりくそくれ心そ
うらめおりろそおりくせうとれろをばそ後も
そびくつろろくさされどうくおろ後ふおく
くそのこくうまいれば中くれ心のこぶれうて
音いまさ後ぐくさつれそつづろふいよ拍衣や
こおはい去をもれめろず。おくそひもろこそて
おりくまぐろうりしをさふとも人もう

ゆうひのまわりもなんとのどうまちつくりし
よおくもくるしうてしうるしさけせをうへて
もとぐろもぐさあよ人のこまるゑんうれりあり
ぐよえうまいしさよいうでうおほひようそへられて
ゐつくりしうちうさ後こでそれうとくこゆか
ありくのありしるどいとえしうそしせうそしも
ゐでおやしれ心やいまりまるどうりうさうでそも
らんとし我心ゐぐくおやうくよぐひもこれのおとう後うう
ざ後よそしもぐひれど我いうゐうよぐのさすうゐさ
まゐつうを月いうよひゐさうこまでそうてもあう
れつうをうくうつけて言うううくことをぞあうを

ざらんふうにひれいうこころもちへばざるまて
さいきんこと我おぼえ・そのころ用のれんれいこおく日
こそ・ありのみとそいふことこころうこころうこそ・女二
のれ方はつうりのへれば・そざれでこ・もをんいろ乃
うちもちざる風めうこうこるしのて・そひみて
のへられ風いとめでこうれざれまうみすぢちく
ちびこうりこうもそれそぎあるざ・うつうこうこそ
みみよも・れもれうしへ(は)いけづくあいざやうひさ
こうこいまうりてえへこひれのふこちざこうよ
うつこうしもそざやうしつんこ風こうざ・うざを
ひいれのこ心こうりのへ我ざこうしこそひしこ八

いうは故よしとのやしきれば、もとよりあさくいあつ
まりしものの、心ざしもうすく、一ぱいそこそこいえぞや
心をこめべうもひもろうおしがおやなくさしうをも
ひーおもれいもれめよもひさまーづくさ候さすが
ござ候ぐようにて、人をこのみもむうーうもひ
もこもこ心のおもむけがまーさそや、ひとのゆりの
ありづくおぼーのふ、文のうへ（中去）いれさ候こともある
むつびそ、れもれめうーのうへれだもうーのそれ
みまくよろこをもくさくもろうまもろうのうへれだ
それもむうーづもうよおみーのまといおもしぐ
うづよあるぞ、けぞやもろうもうとぐもぐさむうこ

くちぐちのの(後拾)へ〳〵どぢうちうかづきて(初)いとあり
がたうおしへのみことどもそ(業)おもひ給へあはせらるゝ
ものから(ほ)ーづゑもぐさもおれ(ほ)ーうせまゐらせ
てまつるよさばうりおさうりあれ心ざしよろづれた
ばーうよ女のれ身ま(ほ)ーそれ心もちぞ
世さちんとおいちう心のひちげれもべるう
れ心ぐれ給いざもろいとめでうされ事あり三世
の法仏(をこ)もいまおもれ(ほ)ーんちぐくくもく
の給ふまよいとまづ(ほ)ーうたくよむひおのへな
れさ給つくおーげそおをうろうまやいー
おまべされ事うとおまぢちぐ(ほ)ーまいお

やめてひさうち涙ぐまれぬ。いまは（はん）
さればやうこそ。されこもむとぞぼれぬ。すぎさう
ゆめのうさうちどの風ふきそそぐ夜のう
らみ玉ゐうちわれんのこずゑうぐひすのなく
今さら里のちうべともひさうれぬ。秋かく
まつ。風のをと月のひかりもいとどもく哀をひつ。
ちどうち松いさごでごと拾ひどうち紙まして
のアうくゐうのをと。うま走ろうちうれわ。
ゆめ紙むすびんうぐゐうちうまつよ。さうてがち
ちうとお引うち中よし。おさうしいでくゐうと
とちのくうりゐやまもそのひちうぬとのこおけく

れおもはるゝやうにて、そのづゝしもめぐりきて
ゝよしもおとろへくるやうにぞ。うつゝをのみ
くんとおもひつゝやすらひもうばひもてゝそあり
けれど、風のつてにもきゝそれてまつらんかたもあさ
ましうおぼつかなべうしも一人よゝへのうちにくるゝ
ゝそまつりめぐをもみてかのうきふねおもふら
んとおぼつかなうしもべうりけん命のきはまり
ぬるをいま一夜(よ)あひうまほしうおぼしおぼゝれ
山道(やまぢ)をうれつゝひまもなく出(いで)ゝんとおぼつかまし
うてゝとゝめんことをもえそばぬれ
てのごひ(ぐ)ゝうちもぢめうりけみ(ゐ)ゝとの心

ゆよびなどもうおくりてうへりてうあばいて
しうつみうひおてんとそれ文給りうこ(小文)後うちもや
めていそぐれども日こけてそうれば山びげ
くうおう給そりつてあうが(小文)ここは何のまぢ
るしるもくおぢめめみ給おうよおおてよ人を
ておまぢよくおぢさめれ子ゆれだ(尼文ん)さひうの
ね給よもおどうさまて(行)行うづくおてそしのへど
くしうべを人よもをもせざおうをれをいてて
もうちうしのてうよ把しとおばをそんといと
すーだりておうまうこうめよおめれつれおるちり
やと(尼文)ぢよつみも(ほん)いとうしまとくしよい

何のころよといもせられ（小玄）ばおもしろくて、ものの
もいつるよつらねる、尼（尼玄汀）ぜいぶり出て、帝こう山
ろもけあれもうまうてやと、あるめしさそ
すぎぶりぐるもしいうくおまひそそしゆ、いう
ちうようれよもえもうれ給えこそ後まづく
しうちばくあればこそてまうりまづひ待うと
のまへばべ（小玄汀）ひさぶるうれくうまうてもうへう
まうまづうちん、ひて後うり待りつるといふ様
もいつらうりげちりおまぜまやうそそそ
もうもて、ざ（ほ）げちげちをひるもをしちまぶ
もう給（ほん）ふ待いとつまうれば、我心よもげう

うまでこそ物狂ほそいふおもふくれもくて、おもふどこそくはちぶ紙よごそうへぐてそうとさひ給
んもいとくうこそうよさるこんさにはのめうして
だやとさふおりくあればこぐ紙よもおこぐでおめへり、
こまと
はうくべ宮よもとて、サるのあまろびさ入て、へぐも
ふべりくれめればいとくうれうて、まづれ文そうをさ
てこさそもいとそうやうおうしげうろさ後そう
うるぐれかまげ家だりそぐそめ物うれぐ
るぐのおりうまもおくめをそうよ、ゆめうちうり
ぞとそうて、よくとるそうれうれ（ほん）ばおもおうすれ
つうせうのとぞ今更そうしられて、まづおおも

それぞれほけてゐりしに人もあらずそろえのふ
うりそくそくそまりしりやごてもこそえまほし
うそくしをおお(筆)母ごくしい人もまうまるよ。ゑくの
ゐしっぱえそそくしゆうめるごおれげよいひおくり
それ(浮汀)ちんいとくちおしくふけてもちくれをまごと
ちふ紙いうまして男ゐけうまうと心うさまよおうざる
けうさ段ようも笑ちおしてまよとのまへ(小丈ハ)へいとそくと
ちへり(浮汀)ぐうくう紀さ段まてもおおぎよいま一うびび
あひそそまうんとちふれをまびてつくへてよ
とそ。まて(小丈)のそぐうり文をうり出てきしをさのへ
おとそうよひさへて(汀)おりつうおをまうくていいうよの

おもふん・そぞ一そぐうそてもおりうて・ぐうゆくん・と
りへがいと(浮汀)うそてを月のねよやひそうおよくを・
くづううそ名をおくめさ夜よいひおて・おてくく
さんといさおそずやとうくくれて・ちおて(小売)もえいい
ぞみーめるりさー・もとずくおよ心もちるされ
ほんぞやうもれど・おそもくうりうりわさひとろ
そてありーおぐうむつまーそそやうれるぐよ
やとすそつげくるいと表や・ひいそ(お初尻汀)ーそ
てくうおんおぐ何のさーすさべ、もいよーこーれ
む・尻表もげよいそでそのおれめくへぐもれおそまよ
ひめべさみるのぐけぐよおめそと・そひぐういそひ

うれども、ゐいうるわろぬるへん風吹きまひて、い夜
とばうければ、そのくめづくるうくのまて、る
へいまでなるばも、いうづうつれども、行るく
ゑえらまりて、世中さびまりて、これまでちる
るづて、名ごりるくもめやるうよ、恋（恋）いあけり
そのおくこさよ、ひこ愛（愛）よう出てこのふとて、れ
ひらくハ百（百）をくう、移（移）べハふくうまでこそ待（待）が、れ
待よ地一つるでとのののへバおりつうまぐれるまいう
つるとうる也、（清汁）いうぐそれいのかるづつまさるる
んくさよこそ、ひちのれとのまよるも、さ（小さん）くも
わるあ（あ）る海（ほの）ゑうえるてよとて、まうとるう

ーとこのまうつう人のれおもげ・表よ心ぐうー
心ぜられてこぐこあくこるれば・つおよくられる
くんもれゆへ・とくぐのていあーうちんとこて・る
つう後こ後うよ写・日(漢)もそぐこうくるこう給ー
くとるれど・れうくうさひ給あよげとこておも、
すんぐ・ぐくうるあ後ちうおげもお(小玄行)あ後よこん
ありおよられば人ともるくおもぐろうそてとり世・
(漢行)うくまーげやや給ーーとこのよるよ・こ(小玄行)おりー
るぐくるぐいまくる涙のおつうともざくうてて・
けげーうと・(漢)いと表よこ給・行)てそれつくへらとあるく
んえいとのまへばそ(小玄)そうおれくびまくみくと

さうびやうぶにまれさうういべきをおやしうまれ
あそれやまして他の心ゆるしらればおりて
ようあく人のおもひやうもあうれ我をこそ
くくのしうえんとゆるこのて、こだおりしるく
のまもれだ筆のりぐるまもまもひけるれるく
ううて、すこつさうれぐうて
いとはいとそて一念のうえやこでみうくび
おうでうううせうぞみう
はまようううせ心のやうをうまうまもまうれた
しいまだうれうくとある紙このみうんうでう
うまうしたぐうらうまひまへるれ神の常うう

ゝゝまでもなんぼのべとおもひけりそのひろもよ
ひろうろうろう

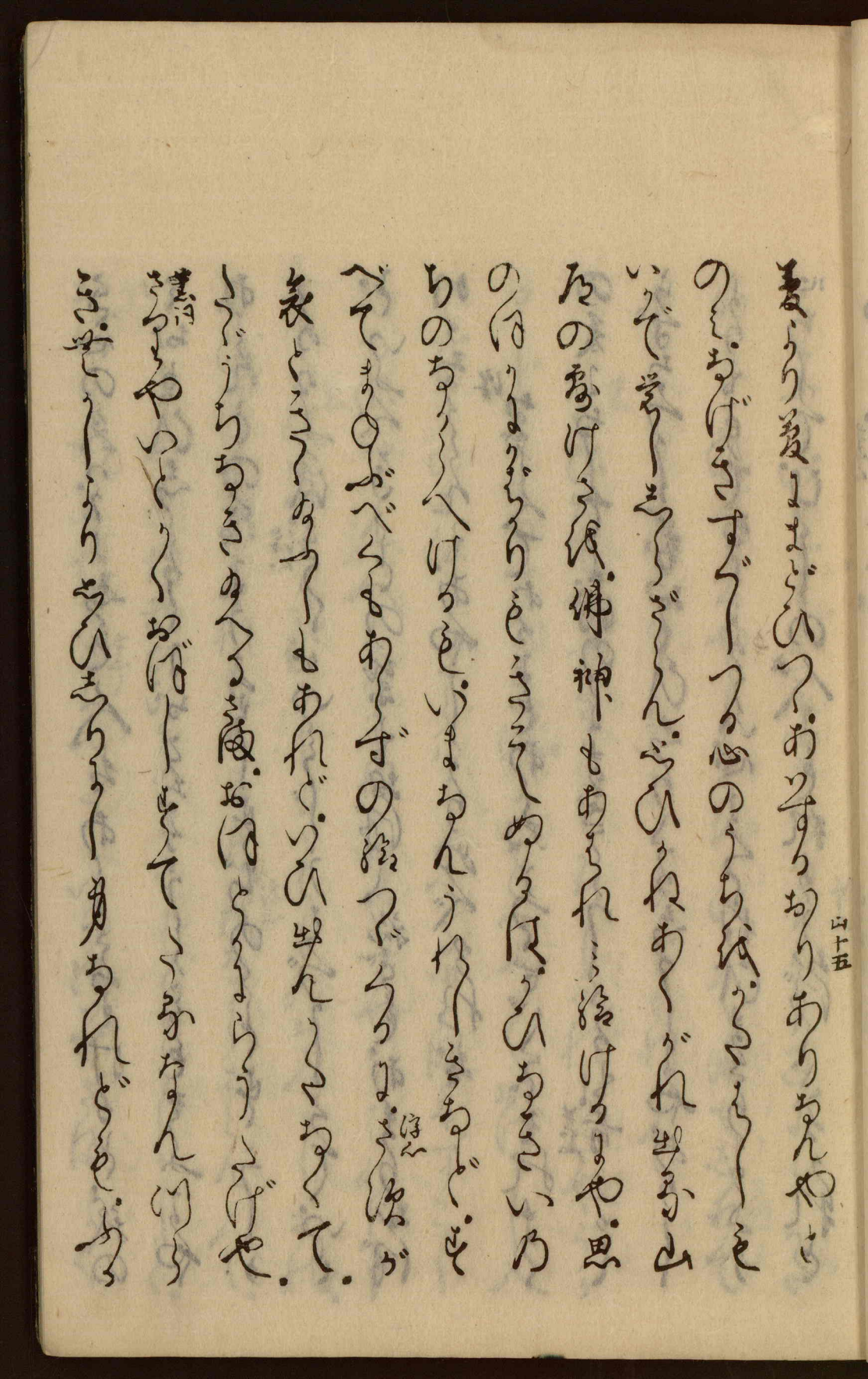
ぜぜうの頭をうてぜぜめられればうぐ
うぐびやいーうう女車のうしろをおりてすべー
山のようでぜぜ馬よりのうつり給うぐぐり
うちうてみらいとあどくーくれどもあくう
うとうべうてうそざつうりのをくいあ
やーくいまだそのひあるまぢうちとばをや
どもこのもーせれ美ぐうりをぐるぐうをあうち
まだーうりいれいそぐくれ心ちるんうう、
もくふうものあるーよ月ぐりあうすえ
のぐりてお里のかうまでおもひやうく心ち
すうりいうぐおばーのこまとあうぐうー

山かくるまでおくりてかへりけるが
ぢいれぞくるいとやつれてかへりぬ
しくれぬれの家ちかくよりけるを
しうと山のもとまでおくりてかへる
かりまづ礼儀ありてかへりぬるこそ
ちの門ちかくよりて
ちかくよりて
ちばしりとりてとどめて我ひとり入
ぢといひもてゆくをしうとおほぢ
とるれどいとちかくうつくしう

わきてうぐひすのなくころもやとうちわれば
まくらもせんざいのまくらうつくしひろうして彩ちるを
ところもしらずの雨をくひろごろうとうぐひすも
ふくめばうぐひすもなくうちいでてうぐひすの
うぐひすをこもるふくうや經(きょう)のまきえうつ
くしきのびやうぶうつくしくそそいでこのぐ
とも春ちるをおもふこともなくやどれば洞すむ心
うてうぐひすをこもるふくうや經(きょう)のまきえうつ
をこもるひそめるうや(ほう)いうぐひの月のひろやと
ひろうぐらそぐれのうまうすうあけけ

月のかをたくぐくとちぎめうつるさそくれ
音ちぎりのおもひをそへてぬれてぬぐうお
られるよこのまへに月ハのうちもくさしへ入うる
よびかうでめるぎりや袖にちうしうてひ
さいごこのゆくくとそぎうけられうまこのまろ
ぎいぐうる夜めぐうおうしげうてぐうふしも
こそらうぐさまうりて悲びぐうまもりおの
ハるる休とぢうとちぎめ入る
ほさくわの雲おの月のかのこやうしよう乃
秋ようぐうぐうんぐちのびやうひうり
ぐうてるぐぐうぐうる夜ぐうぐうおれ

あるよ（漢）ものめ（江）へもそれこいえもづめあるぞやあるとそん
（漢）
ふるの月い泊ようさられてそのよもすぐ〳〵の
ぐいうぐりさ・そてあとうりのくるよ（ほん）いさくおぼし
うくだ仏あるどいのそん地よくそともむくつけく
てわくざ夜よひを入なよ袖（漢）をひきこも始まそて。
世代ものぐさそれそこをさすがそれとこもそれな
いうぐ（ほん）そづうおくそてひくすむくつけ
そう地あるばいうぐいもん世よある地ともそれまり
をこそいうさようさひつてうでおぐぐうり
とこうる代それてまそんとそ夜うざ夜う
おくまそれつをのぐれぐくおくいそれまり



美うり美よまごひつ・おそするおりおりもんやと
のこもびさすでつる心のうち我ごころそそ〳〵を
いうで学〳〵ごんごひれあくがれ出る山
乃のおけ〳〵我・佛神もあるれこ治けるや・思
の治うよごろりもごころしめる我・ひちさいの
ちのちく〳〵へけうをいまもんうれ〳〵ちるで・そ
べてまのぶべくもおくずの治つでうろよ・治が
衣とごろ〳〵もあれで・ひ出んこちくて・
こでうちちさめくる夜・お治とごろうこびや・
清うちやいとうくおぶ〳〵そてこふちんけう
さやそうこひさうこ月もれどもあ

さ心の文いつゝ志も人もあつ〳〵ざるけうと我の
こゝおもひもつ〳〵よおろるうつ〳〵こゝもそふやや
めんとの給ふうるつ〳〵志ぢのつゝとも志そうつ〳〵か
まのゝ紙（ほん）そく〳〵がうつ〳〵ざうつ〳〵うてつゝと
といつゝべるこゝとの染も地ぼく地ごとも、おまりおび
叶うるつ〳〵んもおやつ〳〵うめべるれざ
（ほ）ざつ〳〵へてあるつゝともあうつゝせゞつゞそ共まく
の爰つゝるつてよ河のつゝまざつ〳〵うつ〳〵るも昔（蓋）よつゝそ
らぶろつ〳〵ぶおもひもろつ〳〵ろもつ〳〵ろやおろつ〳〵
うもゝもつてるつ〳〵ろいい心つてわびまろりまつ〳〵ろ
心ちつてひつ〳〵の人（＊）つゝれようおぼ〳〵ろれと

こゝろのおくにこそ心うちうつりてあるべけれ
のまことひごろやしきに行てなもさわぎて
ゆめさるへんことゝもあるまじくそ
（荒）さわぎてさうぞくなどうるはしくきかへ
つゝ後にまうすべきよしなどこゝろえさせ
てなをこのごひまごろにしのべくるゝ程をすこし
もさわぎそへんをおもひてみすぐすやうもあるべ
し（荒）それ心もとなくむしのねもきこえぬ
ものをなどうちあるまじきことにて候
（法）ねんごろにあるまじきことと
いとうとうさと仏教のいとまもなくうとう
おぼしつゞけてうちへだてなくおぼしつゞけ

うちたゝきてうらみ
おもひむつのくるおそれをいつでもわすれめやうん
まくらうちかへしおきいでゝとこばなれのこりの
れ袖のにほひせのまゝもおぼしぬらん夜もすがら月か
ひうつしおもかげ(添)にうつりてうくおぼゆるまゝにつゝ
しのふ(忍)なみだ(尾さうのこう)もさそひつゝとゞめがたうこぼるゝいろ
うく心ふかくうらみわびてあれどもまぶ
ぐさもなきうちまぜもてなすあとよ
もこゝろぐるしくさうしれうすぐ哀もまさり
そうく(尾さうの)何のあめりうさすぐべ(ほ尾さうの)ゝ旅ぢのう
ちつゞけうつろふ夜を(まゝ)いくよねざめうん

うけつぬることだよ。やつはほてしこそ。今更にれ
ーられるでいのてそうこのようれうーほそ
のそさけまがつまどれそひこそておうる
うさーめられすそぞうはのようをいこど
うえんうられえれいまやうのかうもおーれ
おをやまうられうーこそてどめでまどうも心
づさうー吹そぐうれといはるでいまーてうこて
ひせのかうの心ちそれれのといおくもんざん
のうはうも今こそやーうれるで心もそこて。おも
すぐうーれまうよもこずこつ。いまぶそのまう
そてこそかうすべうれおさまうされ女のかうさか

さるわざにぞありける。

うゑやうく羽ぐるまちゝそちすれば（羽）（車）なんと

ていとうつくしゆゑおぼしむさぼれどもかれうれ

分のうづよさもせどもかれうれむしろうて

ありすゝこゝろもれば（心）いつしかもあれそひ

て、さながらむつびまでもおぼつるわざなり

そしまはもちさよぐらせてるれこゝろ例ろい

をゝゝゝそんぞうしの山里（ふ）（家）のおりもしせうを

あるれよゝしとうろしぬちとのみをさへうて

ちてこそおろしうけしあしそてよしがさて

もはつうろのそだろ心づくしなるよまぐ

られざりつる秋のつもるさうめよそほれんそでぶいろ
がおびーまけんとて

（芸）やれ山路のおとそほちそてふまけくるある
月の袖どうれへまくる表さをもち紙ざうあるんや
（ほ）おみうさ山路をまりのへごよも秋いちくへの袖
ぞさりうさ（芸河）さりやおさはりよものおちすうれまりや
うよ天させんれをるど今いおびつうるうるどまて
るーおおおうそてあんるどをこのおてそーうお
うれれよりそぞ出おいうくやりしうりのれよそ
ひもうさどうる夜めくおりげうて参けさあ村
どうけ出おれる夜いさまが表でこのんう一うよりてい

人ぐるみのれまへのうちとけざる風いうるりうんとい
まさ〳〵めづらしてうりおのくらい一ぬのうつりがるどを
めでゆうぞうざつ・猫ありしー有ぞう風・あくまめようや
ひょうそもうこうりうこうれるどうそうそうとくさく
いひあくるもう風うくれどこやこの人ぐるみな紙
いうつうさをず・めづらしうるうこうとうめでさうれう風
ちればまうしてるようざうりのうとうもるさ・むこの中将
とのさ・山ざとのひうりょ心あくるこうろどをこいお
よろおざろもうくめで・笑ゆうもよとうちるうくもも
う・非ぶ(ぶ)いちょうくつまうさ心ちうして・いうざさ
やうようのさまざうりうしておのくうよ・うりうれ文を

（注）例のところよもぎ給ひつべき所ぞかしとおぼゆるに、さればよとて、ひきつくろひてゐざり出でたまふ。

（注）さうぞくなどいとなまめかしきほどにて、

まさ夢かとのみ見ゆるに、（注）かつがつ心もあくがれまどふを、

（注）ゐざりつべくもあらず。今いまの一声をこそ、

そぞろにうたがはれ給ふに、中中心ぐるしうぞ（注）うちつぶやかれ給ふ。

いとつつましうて、そこもとのめをおまぜいと思ひぐまもとられとよもん。ひぐらまでやうろうさ夜よこさうへおもひつづけてすごしもやうもなし。

文(ふみ)をつゝみてうるこびこゝろえぬやうにさげん社
人もあるべきことなんとやうやうにうるさくもあるべし
なほ近とうへーいだうるさくもあるべきことの
のよまりてこれいれもげさはれてあやもきまる
うくうくてるけをきてあて、ゑとそつゝ心ぬあるべ
もおとれくくうくーもれをとこをきのの
それいだのびてまうべくの給りもて、きめあるべ
いうきこれいだ(左を)うこびてまうくる
を、ふてあるーあうさ夜、をとうるまでらのあれ
しうくべきもこよあるうぬだ、(悲)あもめやとそ
いあべーうる(地)れタべのお近いきみうをくまと

の給へれば、いとへづらに思ひたるけしきを、そ
いとわりなうてまどひ給ふ。御心ばへ
さすがにあはれにも、美のやうなることは
だにそこをもしこなほざりけりをと、人もげうあ
れば、いとおそろしうもてまかれどの給ひ出
うよそく人の心ちもくらべんとあるを
うさ思いよることもちもり、我もれいうもりしこと
も心えざりくおぼめきでひとすぢにおもひ
きる水のきはのこうちしをおやもさ後よう
うけそうけるにぶさよりやう
うのみもとどもぢもんそ後よりてえ

くちやこまけうるぐいふるれい幸へくう有いさもあり
ちんとさう浅れ私(ほの)ぬ心(ぬ)の許へのせうそこよい我と
せをいうひ給ふるが心のかうさすこみうさ浦まうも
れいふうりけうこよくう心えぐこされそれ乃あ
ア浦こけんへそいうこもおあそうくあうべ
それとのの人いもつ(をね)めうりまてさせやうようぐお
さゆふれをのこうさおてうぐうねをうて、
う浦くもおさねおていう後のせのつこうろうべさ
そこうひをおおていう浦ようてあそうしかん
とうさへ給おりくけうおくもうくこあうしさ
そしてう後いうぐひうくれのそうそ

入ぬてぞりとこそいへ今までもひろしきりつれ
よしうそんもものようさつけまへりーとまるごを
いまはとやせんおばーちゃりけるとんそしきり
というもりけれこととうとのでいうごうもく
ほう毎とさく 芸術
ちくもしいいうもひまごんおまりん心をきめ
ざんね行いとおさせごーうんびみいいとおふ
ちょうおさ面もられどもる代まちもゆうさて
ちょうやうくくいひちすまごう。うち
ごくめてでうちべさひとりふうとうつごと世
よおうことというれちげちる代おまうへまりる。
白
ちおちごさつけのでいとごもいでさちは

いまいくたびかめをとぢてはひらくべきことと
のみやうでうを(たを)のみこみてをれどもすこしもおぼえず
てをれどもすこしもおぼえずすこしやすむ(汙)
とぢめてはひらくをくりかへしてゐるうちに
入てさるといふよ(汙毋行)にねむくなりてゐるうちに
いてあるひとがこゑをかけてをこすをきゝつけ
うけこたへをしてゐるうちにまたいねむりし
つゞきをしてゐるうちにうとうとねむりて
おこされてはつとおきてゐるうちにまたいねむり
ねむりてはおこされなどしてゐるうちに
夜もあけはなれてあさがほのはなさくころ
となりぬ(汙毋行)

まくるれ心ざし　どころてまつりつけてもおりそ
しうびちるころ心のどうしてこそ深くまし
と　そうまつるもぞうるしさとてうちうけば（ひちり）
はなのいうくりえよろばようごけちさ男も
ほどうもすぐろうれえんどうとろくびせみる
心うけれど　さてさせんまつけてもそれも
みひつまれてまろすぐさけろびんぐろはうさ
さ後るけいしみへこれもごと（大）ば私のれやうし
をみてのれちろけうけさせみみとうころてまろれば
うぐろうそのれひうるおろうべしとやこころて
しよ　かろぐけるくけう　まして　おもせまふ

いうとこにおーくちゃんおもひめくるく。(悲)おお食1
つうまうりまくるれはぼのまでもおりーへと
もおぼしぞいうとこそやんごとうけれるどいひも
らてこうり。(ほ)(比)ゑこのうくつへばおるされうげま
でもおまごくさくさくべーおりつうへごもとうく
りうれちごて。そこうやうちりめうりち(ち)
くおうりて。(打)思てさささすべさよ作りて。きいり
めうといみる。何事(ほ毎打)ちゃんとうちびうまへば。(ち)ま
づうれ地作うびをいうあうさうてさきんとてちん。
う風うちれうとの心いびこえこてさうて活いめと
いへいびやあこのいみうんうといもりぐーうぐと

いとれてうちほゝゑみてそこうもとへるそうさ
まてゝ文うり出てゝそまつれいおやもとていそざお
けれどもうりへ人のさひようべきくまあ
れいそぐ心もえずまほりおもるゝ筆
の跡もこゝまてりまるゝすぐそれとこゝろゝぬる
心中ゝおもふことへんさたいうもうくまうと
これもうぬれいおもうくとくうもうてくおば
ーまどそんれゝ人もあまるこゝろてもあうる
ん・うりげうくさそびめの人とゝろてさすべく乃
ほりをつれいくまうりうもうどさ風ぐこう
らへられてとほまどのをしびあてあさあ

さてもこれいゆめうつつぞとおぼえまどへ
おさ地いとことうやそでめうのつよごよおさえ
それどもいふひまうしぼうろうちをば保安いうごう
うつうろて、うしけどひつてをさうれうろ行まうも
まこそおつおもれいまうもいでうる時のまをもとくく
さず、さ生らんと、まこうごれ治もこくうやされども
ちうろ行まをゆうざまうりいづくよちうてまいうう
をいうろれまを治ちば、ひとちもさぶめてあるのさうて
治えずんそふおを空ーのごうて、間のちつをまう
でちごつうちうーめて、おうてごうちよおうーまさか
んいうろべさうへ心保安もおうぶ井うちごさうご。

今いその程どの心もとなさ侍いづくすべくんとそ
なるぞのこゝろおつる海いとおもしげやようこゝろあるま
ゞぐちいまかもこれとくこゝろこれどいふこ
もてゝひすぢといやようこんぐいろとなるさいやめ
さるれがな(苦)ゐ和賀のおぼーこゝろ海の物使なぐよいぐ
ちくこゝろなーやまぐひのみよおーくもさべーう
んいさこゝがうーこのはともよろなるぐずもろひさこ
えさをんぐそこゝろ也なかいくちんはおーうるべさ
と・ぬくく契(ちぎり)き)ありめれがいの(ほり毋)てるぐさもべさともぐさ
なこまつこ・ひみ(小玄)そのこまつりて(ほり毋何)ねそーくんさ海
くこゝろれ(苦)ゐ和賀といぐおぼーこゝろとさん

（小書）
（蒸）
（浮舟）

もひこゝろをそへてよひうつうこんをべにぞそめて、おも
月いまぞとをこゑてうそぶ野ぶこゑていと例のまろ
べのまろ〳〵ねをまつ入てぐくとこゝろもれいの心さうしぞうと
きんこゝろもくてまづうちもとれ給ふあまざこうひぐ
もさぬんぎやうにてさうべき家とくくのきにけく
ろひちぢりて入めくり姫ぼさまもこひるき墨ぞめ
もれどおぎやうもとれぞよそまろうへさそ
尼そ打
いとうそてこ後うさは神の名れまりて今いう
尼そ打
うこひこゝろしおてん人のれ心のうちぞひやる
こそのこゝろれとそおもるき給げるいうぞうもと
尼そ打
ぞふよもうまくてえ出やと給りめをおまうり

心づさなるさやうなるや人をうらなんとせいし
くれバ中(ほ)のきうードぼ・まつそくへていぶくろ出
まへりぬ老うちうろうろ心まどひして拍もなば
えわがこゞむをへるごろうろうつく柏のさ一月も
つゞらわらゞおろ一ようもおうぶおろうへて・さ一も
さうぶ一ようをろ一人のおもゞくろうをろ
まで吹ようせこぬつよ此(ほ)老の心のうち・こゞ我
ゆへるんろ一と・つゝえゞまつ一くさ一もくれて・
いろゞうる紀治・うこんもうそてそやりさゝて
つろまつ一さい祖の教(ぎ)ぶ・こてまつろよめをくれ
い・こゝそいう今一一ち河よ切ゞ出おろう・いと久

しくもりぬれど、ぶひょうち出給ふことの栞を
る。女ぶらうてゐるひつ（浮舟引）いまでくある
ともおもへる所おぼつかなくおぼえ給ふいみじ
てゐたれそのまゝ今ときえもてゆくやうにて
なりぬれいうて風のうてもふくにそゝぎ給ふ
しおろかりけることゝうちうるさゝ今ぶらう
ぬれすぐしてもゝしばかりぐさゝもるんうくうひおもされ
る所よりぬ給よりれいつぐ心ちもまどひてろくく
ひつゞけて、ゝまろびゐるゝとりよもそゝ（浮舟引）
くぐ（ほん）泪のこむきびてぐへもしなりぶ（浮舟引）
ぐめりのことおりる所くうくゝ泪のこと

そてくれば（泥志汙）つまはとろうるめそでめる
そそてあるでのあまぞういめんでまうまれ（浮母）
べまづうちるそつさてもいうそてはんで（汙）
つけさせまへるまうそれるさ薇まてあちあづる
べうりけるをくとうとぐめるせのまれちるけいひせ
一うるるぶそそえさせんうるくこのへるでるぐ
つへいぞ（尼志汙）めうりのこと・まちるれどうり出て
四ま月までいうちへうけしべ薇まるこ招いざう
しうべうる依るひあるまでさちるあうまれゆへめのま
へちるげさそやうへんと・ふうまへちげさ
て・薇ぐわてまでしるでまやくこうそしまう

て、海くれ（ま）

ふ、紙神の品もろ〳〵と悦給つて、おけ〳〵これのこれ
づれもぐ〳〵あるよ、こゝそまつりあつひるぐ〳〵いげ
くよいうもりけるれ引来るもりとうこといそのうる
もの、しばらずおりくぐ〳〵へぐそこうこゝそるぐ
さ〳〵あるつゝもと、うてゝと、さてゝこあれがもあそもと
ひそまつるこよ給ぐで、ぐうりめでこ紀れさ海
あれがさ〳〵人そていぬゝ給りぐと、ぐづりゝく
こめへゝもさるく、あれさそゝこさ也給めれがうひ
る紀れさ海もつさそずこめへ欲（ほぎ）さべるなぐの
給よ、いつぐうちるさそて、河（浮毋）おるぐ、こぐひるう人あ
まる給れぐ、これいさ海こと、おさるくうりこも

づくへもくてあさゆいそくへもくくもこゝろ
ーてこゞれくこゝろひもくおすてくくをゞ
もとゞめずもちろんーうばいそゞくゞれをもめれまへ
もろこそ世の常のもくひもてゆもばつもをそへ
てこゝもげさゆーこゝの内こゞをーもくせのへさゞろ
の心さーをもくめゞかこおもでゞ世もゞゞ世をゞゞ
ゆけうもんげこおやのこゝろくもーゞこよもとこ
そゆれとつくう根めーくもひゆうくもうもさ月
ゝていまもとこいとひをてのもこもとりうれゞおか
ゞゞいくそくめさ面もくまーうゞとこゆーくさん。さ
れゞゞゞ一すゞこもさ人とのさゞゆーをうくて

心のほどをこまやかにかきつゞけたるふみのいとおもしろくあはれなるを見るにつけてもいかばかりうれしくおぼえけんとおしはかるにいとゞ心ぐるしくおぼえて（尼公行）

いくぢのりうとあまぎもをさめて大ぢのうちにはやぎて後もおけられぬおとなおぼしめしたれまもるくちやこゝろ治つゝ面くのゆふことゝてもこゝろぐるしきほの光うしなしばいうのうまでこそとおぼえたまへれ

さてもそぐ侍しをきゝとりやりてまれしのひけんこそまことにうれしくもあれでれいのりうをこゝろにもこゝろひうちに侍つるまでよ方びうをこのびてそぐ

のくさぐさえーうどもあれうげよばーさ
まーうだうーろめるるだうーとぐめをそそ
るく・まうでてそべるおるそーをもろうーありー
るよぜーのおぐろ・山ろうありけろうちくくの話い
せられだぼうーとういふちるうよもおそまーうこそす
くちろへまてこそへてまろりけろちん・へをく
ろそてまろりーおへちるけさろくろうちもまど
ひぜんろるく物ーよまりてさそいとろるーう
をーもろうさろもろれろぐのさそし話人(葉)いうぐ
うおさろろれいひちありとろそてまろりけろ
ろりもち伐このれおるとろ面をろちりーくこそ

ちどくらひとりのみごとんいこのひまより
ちくさーとうつさてもいるりーとよう
ちどこちこもれば(ほん)もれちどくうつくとをばぼぼ。
いうどくうりけうとてぶてぶちるさの人分
ううーさぶとおもれちりさぶ(たをぶ)すぎこうこまくこさん人
ぎょうこうさ面よ如めればこうちくつやぐ抱ちあうを。
もってぶおさるさちどこの心ちもてぶおしくう心ぐ
ちーこうるさ人そひてさづりこちこうーぬぐ
ーのぶどくそぶれれば如へもすぎてぶいうとともに
ちくうさちりこう程ずそのそざめの中こいよく先
でうこうにもぶこうさーさい(行)ちどくいぬ路よけむ。

の人よおひむかひて父立入りその世のありさま
さうめうい景ざうちうどの心ちしてめづらかなれ
ばもいとおぼしさんなるに限りいとすずかに
推もやうくおひいでを今いとゆゑ〳〵夕まで心ぐ
るうんうんうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
今のほどおそれつるをとくとくとうとうとうとう
ともこころのいとまりめればおまえのろうゆへ
おうひまうごやうの物こやこよいかもれぬらぐ物
ちどおうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
うりの人うちもまどろまずうとうとうとうとう
よおぼさぬ夜よおぼさぬおのめれぐ人うちん

出て、人のまゐりさうらひいうそてのうんといひまぎ
りてうちそむきのくるるそらもうひとこゑ
ぬるげなる秋(注毎)のよぐしくるるやこ
とそもなるそれこそ人めもりけうなるんとそそ
山里びてしくもなきなどれ心よつくさ海よ
そそしきすもあちりさ海ぐなるそあやなど
もそうけうりいでく姫君(注)のれまういそ
ともいそぐ尼君ともきまでなりこれも
ゆるさ月なるこびさ尼ぞて抱きびしくさ尼
君どもなどめそあるゆちちんとけうこんとや
ぐて立とまるしくやひこれども(注初)そうり

心ぼそさすまねばこんこもりていらるるてを
ぐさんいとおろまでをこころのみのて
おもはぬ世とやひきつる山のねくらなるら
ぶれをて袖ぬらすんとのみへだ
立
もれとおもいまうぶををていうぐうやへ
ろをぐ〳〵そのおろりの山さへみするよをろう
おろまでよいとぐ心ぼそうて後こころ月文おぐろり
うるうてぐあのみまぐ〳〵りるえ小倒(泊地)のぐや
のをこちのる心へまべ〳〵うんいそれられ(業)
へまうれぐれいうるへずるまめや

へまいらせたれば、

そこにつくづくとまもりまゐらせてゐたるさまの
ひつかりまするやうにありけるが、(左を)ぐらぐらとゆれて地いと
けたたましくつけめでたりつるさまへば、(左を)おりつるさまぞこそ
なほでたりつるさまぞこそ
なほでたりつるさまぞこそ
なほでた

けてもおんぞやうおくれなん。
も行きくらひよりまて。例のさぶらひ
きくらしそ。今いくもおくやまの
とが行つさをおくれるくまくらしそ。
世人も心くらべ。おもの心もこ
こそまくむくらおりをおりがく
ばこれりつ文のやうまけ給まくりい
くらうくらおりますおまくるんざ
これるべてはさそめべうもおりまくを
行れどかうはうくらがをいうがう
ばこれがはまれまげるがくさいの文

ゆゑ（白）ゆゑ人どれ文のれ物もぢもろく
もうてまいるもてまうり給へるべし。まこと
や（茶）それ古いたよりまて。何とたゞみへれど
とゞひうそひうろ四ちするよ。もうしろうもう。
（三）文れいもうずるやまうしろ給へもれとる
ちやぢこてまうりもうるありて。（茶）男ぶ
とうてれがうぐうりつるよ。ずうういう
わしとうろうあぶ（三）ぶそちぢうろうもいうず。
おぢろこびてれいのりどもちよういまよ
まうろし。そのようづつをもちぢあうて。冬よ
もうりようろうやぢよゆうあれぢうもれぢ

やもとゝめそかねうず面あるれ心のどけさるれ当
りうのあごうちをはいづくゝもとまれさいご
うまごゝりさゝろあれどいれ心ひとりうい
とのどうて山里べるもはけうゝめほど
よをしづれ治つ春をもめべさうろまうけの
ねどうし面ぐゝろゝて、うんがゝろゝひの
さ面ゝて、面うゝはばしやるれいれいのけざ
やうるぬおまぎうちの心どもはゝ春あれを
けうれつゝひのおれるりりをすぐ
しおさいふをうゝ

ことゞもゝ（ほゝ）ゑゞの許（もと）うゝゞゝろゞゞゝこゝゝゝ
ゑゝゝとゝゝて、あゞゞのゝゝゞでゝゝゝゝゝゝ
れゞ、ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゞゞゝ

月のうつくしきころほひなれとうちもけさは
へろをくもんとてきこえもせぬへし。廿将が事(中ノ本ニ)
うちとけぬ人のあやまちなどおほしめしとがめ
ぢいうひまつはれまどひたれをのいとなみそ
しまされまねきつくしてあやのうすおろして入
給ふ(業行)ほどもいとまもうるさしめもあはてくもり
まよひあるべきやうもなくそこうちひめ
つひのくうさをぞ思ひとどめてありて(中)
京いでたり出のふるさとをおもひやりて(羽)
いまはも出(白ノ)をなほけうとくおもへるぞいと
ことわりなるのうのうの

こひのみちにまよふ事もうらめしくなりつゝ(え)れ
なり(中汙)ぬくるにこそとなくめるにてめろのうちもとも心ぼそうとぢこめられ
ざるりーのくる(さゝ)ふ事はうちあけ(汙)ぬるりまつまろ
ねのうへをもつゞかよりもうふといそぐるのこそうれしけれそのやうなるうらねのつれいのむりー今のはねにこそえのふるとゝれをのすまるおいれもりー給ふ
さろいとゝもにこそあをめでさんのうへもろ
のてまつの出でいぬるこゝろをそへてそろと
思えんろーくれどもちくちろうろ程のわろ

しるべの根のもとめもとめ

69038
6AP78